

遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(二)

— 『メナム河の日本人』から『王国への道』まで —

長 濱 拓 磨

〈 요약 〉

「약자」의 문학이라고 불리는 엔도(遠藤) 문학에서 < 페도로 기베(岐部) > (1587~1639)은 대립 목덜미의 「강자」라고 하는 중요한 역할을 짊어지고 있다. 그러나, 선행 연구에 있어서 엔도(遠藤) 문학에 있어서의 < 페도로 기베(岐部) > 이 주목받는 것은 거의 없었다. 「약자」에 관심이 집중하고 있었기 때문이다. 그러한 현상을 근거로 해 본고는 엔도(遠藤) 문학에 있어서 < 페도로 기베(岐部) > 이 어떠한 역할을 다해 왔는지 그 흔적을 확인하고, 재검토를 도모하는 것을 목적으로 한다. 이미 논자는 「엔도(遠藤) 문학에 있어서의 < 페도로 기베(岐部) > (1)」에 있어서 『유학』(1965), 『침묵』(1966)을 중심으로 해서 < 페도로 기베(岐部) > 이 가린 흔적을 밝혔다. 그러나, 2작품에 있어서의 < 페도로 기베(岐部) > 의 역할은 어디까지나 부차적인 것이며, < 페도로 기베(岐部) > 이 실제로 중요한 등장 인물로서 작품 안에서 움직이기 시작하는 것은 『메나무강의 일본인』(1973) 이후가 된다. 거기에서 본고에서는, 최초로 < 페도로 기베(岐部) > 이 등장하는 『메나무강의 일본인』(1973)로부터 마지막으로 이름이 등장하는 『왕국의 길』(1981)까지를 채용하고, 작품 안에서 < 페도로 기베(岐部) > 이 어떤 역할을 다하고 있는 것일지 그 흔적을 더듬어 가기로 한다. 그렇게 해서 엔도(遠藤) 문학에 있어서의 < 페도로 기베(岐部) > 에 대해서 재검토를 도모하고 싶다.

はじめに

「弱者」の文学と呼ばれる遠藤文学の中で〈ペドロ岐部〉¹⁾(1587~1639)は対立項の「強者」という重要な役割を担っている。だが、先行研究において遠藤文学における〈ペドロ岐部〉が注目されることはほとんどなかった²⁾。「弱者」に関心が集中していたためである。そうした現状を踏まえ本稿は遠藤文学において〈ペドロ岐部〉がいかなる役割を果たしてきたかその痕跡を確認し、見直しを図ることを目的とする。既に論者は「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(一)」³⁾において『留学』(1965), 『沈黙』(1966)を中心として〈ペドロ岐部〉の隠れた痕跡を明らかにした。すなわち、〈ペドロ岐部〉が殉教を遂げた「強者」として荒木トマス、フェレイラなどの背教した「弱者」と対照的な位置に置かれていることや『沈黙』の主人公ロドリゴの形象に大きな影響を与えたことなどである。しかし、2作品における〈ペドロ岐部〉の役割はあくまでも副次的なものであり、〈ペドロ岐部〉が実際に重要な登場人物として作品の中で動き始めるのは『メナム河の日本人』(1973)以降となる。

そこで本稿では、最初に〈ペドロ岐部〉が登場する『メナム河の日本人』(1973)から最後に

登場する『王国へ道——山田長政——』(1981)までを取り上げ、作品の中で〈ペドロ岐部〉がどのような役割を果たしているのかその痕跡をたどることにする。結論を先に述べると、〈ペドロ岐部〉は『イエスの生涯』(1973)『死海のほとり』(1973)で遠藤が描いてきた「無力なイエス」のイメージと相似形の人物として、また「地上の王国」を目指した山田長政と対照的に「神の王国」を目指した人物として描かれたと言えよう。以上のことを手がかりとして遠藤文学における〈ペドロ岐部〉について見直しを図りたい。

1. 『メナム河の日本人』における〈ペドロ岐部〉

『メナム河の日本人』は1973年9月に〈書き下ろし新潮劇場〉の一巻として新潮社より刊行された。『黄金の国』、『薔薇の館』に続く戯曲作品であり、また遠藤文学で初めて〈ペドロ岐部〉が登場人物としてあらわれた作品である。先行研究はほとんどなくわずかに4本の劇評⁴⁾が見られるのみである。

作品の原点は1971年10月に『死海のほとり』の取材のためエルサレムを訪ねた帰りに「偶然」⁵⁾立ち寄ったタイのアユタヤ訪問にある。遠藤は日本人町の跡地を訪れ山田長政や〈ペドロ岐部〉への興味を膨らませた。この時の様子について遠藤は次のように語っている。

長政の情熱とペドロ岐部の情熱とは同型だが、一方では地上の国を目指し、他方は神の国のみを考える点でちがう。しかし二人共、日本鎖国の初期になお、海外に向ったあの時代の昂揚した精神の持ち主である。アユタヤの廢墟に並ぶ焼けこげたパゴダの塔は私には長政の姿やペドロ岐部の姿を思いださせるのだ…。(遠藤周作「廢墟と芝居」/『波』1973.11)

遠藤は日本人町の跡地において山田長政と〈ペドロ岐部〉の二人の姿を想像する。二人は同型の情熱を持ちながら、目指すところは違った。山田長政は「地上の国」を目指し、〈ペドロ岐部〉は「神の国」のみを考えていたのだ。それでもそれぞれ信じるもののために生きた。遠藤はこうした生き方も目指すところも違う二人がアユタヤで3年間だけだが同じ時を過ごしたという事実に関心を持った。しかもここでの「地上の国」を目指した山田長政と「神の国」のみを考える〈ペドロ岐部〉というテーマは、やがて「地上の王国」を目指した山田長政と「神の王国」を追い求める〈ペドロ岐部〉というように、「王」というキーワードを含み、『銃と十字架』や『王国へ道——山田長政——』の中の山田長政と〈ペドロ岐部〉へと展開していく。さらに『王の挽歌』の冒頭では豊臣秀吉と大友宗麟の会見から始まるが、「生き方の違い」という章題が示す通り「地上の王国」を追求した豊臣秀吉と「神の王国」を夢見た大友宗麟の対照的な生き方として現われていて山田長政と〈ペドロ岐部〉の関係を発展させたものである。こうした対立する生き方は『沈黙』における「強者」と「弱者」という対立項が基になっていると考えられる。また、『鉄の首枷』における「水の間人」小西行長と「土の間人」加藤清正の対立もこのバリエーショ

ンの一つである。

作品はタイのアユタヤでソンタム大王臨終により王位継承権をめぐる王宮で様々な権謀術数が巡らされる場面から始まる。いかにして日本人傭兵を利用するのか策略をめぐる権力者たちとこの機を生かしてアユタヤの地に日本人だけの小さな「地上の国」を作ろうとする山田長政の駆け引きが話の軸となりストーリーが展開する。

中心人物である山田長政は「アユタヤの秀吉」と呼ばれるように知恵と才覚でアユタヤの日本人傭兵隊長にまでのぼりつめた人物である。長政は目に見える富と権力を追い求めて戦って来た。そんな長政に対して、〈ペドロ岐部〉は目に見えない「神の国」のことを語る。結局、長政は〈ペドロ岐部〉を理解することはできないが、〈ペドロ岐部〉に対して深い印象を残すことになる。

長政 なぜかわからぬ。愚かな者よと想着ておる。が、別れば不思議と忘れられぬ。武士の血を受けたとは見えぬほど弱々しく、その上、熱病まで患うておった。俺とは別の生き方だ。だが……兄弟のような気さえる。

(遠藤周作『メナム河の日本人』新潮社、1973.9)

ここで長政が語るように〈ペドロ岐部〉は「大友家の家臣」という「武士の血を受けたとは見えぬほど弱々し」い体をしており、その上日本を離れた10年にわたる長い旅のせいで「熱病まで患」っている。『イエスの生涯』『死海のほとり』で描かれてきた「無力なイエス」を連想させる姿である。だが、〈ペドロ岐部〉は長い旅で苦心を重ねたおかげで人間の哀しみを知り、さらには人間の哀しみに寄り添う神さまの心も知ったという。そして最後には神父として迫害に苦しむ信徒のために日本へ潜入し殉教を遂げた。外見的には「弱者」であっても内面的には「強者」であったのだ。山田長政が〈ペドロ岐部〉に惹かれたのは「神の国」のみを一途に考える信念の強さと情熱の激しさを見抜いていたからかも知れない。だからこそ「兄弟のような気さえる」とまで考えたのであろう。ちなみに史実では山田長政と〈ペドロ岐部〉が交流した形跡は全くない。1627年から1630年までの3年間、二人がアユタヤにいたことは確かな事実だが、当時の手紙や記録にも互いの名前すらなく、互いに無関心であった。すなわち、『メナム河の日本人』における山田長政と〈ペドロ岐部〉の交流は全くの創作である。

次にもう一人の重要人物であるモレホン神父について考えたい。モレホン神父は〈ペドロ岐部〉がアユタヤで日本へ行く方法を探す手伝いをした実在の人物である。『銃と十字架』では次のように紹介されている。

…モレホン神父とは一六一四年の家康の切支丹追放令まで二十七年間、主として京都を中心にして布教していた宣教師である。彼は秀吉政権下の切支丹武将から深い信頼を受けたが、大追放令の時には高山右近たちと共にマニラに避難せざるをえなかった。神父は一時、ヨーロッパに戻っていたが、一六二五年、マニラにふたたび戻った時、フィリピン総督から依頼

を受けて、シャム・アユタヤに拘留されているスペイン人の釈放交渉のためシャムに向う途中、打ちあわせのためマカオに寄ったのである。

(遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、1979.4)

史実のモレホン神父は27年間日本宣教で活躍し、日本追放以後も日本再潜入の方法を画策していた日本宣教の中心人物であった。この時モレホン神父が立ち寄ったマカオにヨーロッパから帰国して日本潜入を企てていた〈ペドロ岐部〉がいた。〈ペドロ岐部〉はモレホン神父のアドバイスを受けてアユタヤへ向い、日本潜入の機会を窺った。そしてアユタヤにいる間、〈ペドロ岐部〉は神父であることを隠して日本行の船を捜した。切支丹であれば乗船できなかったからである。結局〈ペドロ岐部〉はアユタヤで3年過ごしたが日本行の船は見つからなかったのでフィリピンに渡り、1630年フィリピンから日本へ潜入した。これが史実である。

だが作中でのモレホン神父は、女性問題のために教会から離れざるを得ず、その苦しみを忘れるため常に酒を飲み、ひたすら神からも人からも忘れ去られることを望んでいる墮落神父となっている。女性問題で教会を離れた神父と言えば「黄色い人」(1955)のデュランのモデルであるヘルツォーグ神父を想起させる。また、酒飲みであるところはG.グリーン『権力と栄光』のウイスキー神父をモデルにしたのであろう。

このようにモレホン神父が女性問題で身を持ち崩したこと、酒飲みであること、アユタヤで〈ペドロ岐部〉が自ら神父であると名乗っていたことなどことごとく史実とは異なる。いずれも作者の創作である。

作品の最後でモレホン神父は山田長政と〈ペドロ岐部〉の二人の死を語る。王宮の陰謀に巻き込まれ毒殺された山田長政と、苦難の末ようやく日本に潜入したもののわずか五日後に捕まり殉教を遂げた〈ペドロ岐部〉。どちらも悲惨な最期を遂げた。地上での人間の虚しさを物語っている。だがここにも作者の創作が見られる。山田長政が毒殺されたのは事実であるが問題は〈ペドロ岐部〉の方にある。実際の〈ペドロ岐部〉は1630年、フィリピンから鹿児島への商人のふりをして潜入に成功した後、長崎や東北で九年間神父として活躍した。1639年に捕えられた後も「穴吊り」などの過酷な拷問に耐えて華々しい殉教を遂げた。したがって、『メナム河の日本人』のように上陸後わずか五日で捕まったわけではない。ここには〈ペドロ岐部〉の無力さをより悲惨に見せようとする作者の創作のあとが窺える。

以上のように『メナム河の日本人』は山田長政を中心として、対照的な生き方をする〈ペドロ岐部〉や語り手としてのモレホン神父を副次的な人物として物語が展開する。作品の随所に歴史事実とは異なる様々な作者の創作が見え隠れする。だが特筆すべきは「神の働き」について語られる3つの場面にある。これらにこそ作者の大胆な創作の跡を見ることが出来るし、作品を見直す鍵も隠されている。すなわち、〈ペドロ岐部〉が「転び者」の嘉助に慰めを与える場面、〈ペドロ岐部〉が山田長政に神の働く領域について語る場面、そしてモレホン神父がアユタヤでの日本人たちに思いを馳せる最後の場面である。これらの場面は人間の心の働きに触れたものであり、単

なる心理ではなく魂の領域に及び作者の宗教観をも浮き彫りにする。

第一に〈ペドロ岐部〉が「転び者」の嘉助に慰めを与える場面。そもそも嘉助は前作の『黄金の国』に登場しフェレイラや仲間を裏切り棄教した「転び者」であり、『沈黙』のキチジローとよく似た人物である。『メナム河の日本人』では「転び者」になったことで日本にはいたたまれずアユタヤに逃げ落ちたという設定になっている。嘉助は自分の罪を自覚し、心に重荷を負ったまま暮している。そんな嘉助を〈ペドロ岐部〉は慰める。

ペドロ岐部 いいか、嘉助殿。神さまはな、お前さまのように己がつかまずきに泣く者のためにおられるのだ。もし日本の転び者たちが、皆、お前さまのように我と我が身をそのように責め苛んでいるならば…私は尚更、日本に戻りたい。戻って、神様は罰したり裁いたりなさるために在すのではない。神さまは転び者の苦しみも心底知っておられると告げに行かねばならぬ。

茂吉 ふしぎな神父さまじゃな、お前さまは。

ペドロ岐部 (笑って) ふしぎなものか。私はただこの十年の旅ののち、人間の哀しみがどんなものか、やっとわかった愚かな男だ。(後略)

(傍線部引用者／遠藤周作『メナム河の日本人』新潮社、1973.9)

〈ペドロ岐部〉は「転び者」の嘉助に対して人間の哀しみや苦しみに寄り添う同伴者としての「神さま」を優しく説いている。〈ペドロ岐部〉も過酷な「十年の旅」を経て「人間の哀しみ」や「転び者」の苦しみを理解し、同時に人間の苦しみを共に分かち合う「神さま」を知ったからだ。さらに重要なことは〈ペドロ岐部〉が嘉助に説く「神さま」像が『沈黙』における「踏絵」の「イエス」と重なる点にある。

(踏むがいい。お前の足は今、痛いだらう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだらう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから)

「主よ。あなたがいつも沈黙してられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」

「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか」

「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」

(傍線部引用者／遠藤周作『沈黙』新潮社、1966.4)

「踏絵」の「イエス」がロドリゴに語りかける有名な場面である。ここで「イエス」はロドリ

ゴに対して裏切り者のユダの苦しみを知っていること、人間の「痛さと苦しみをわかちあ」い、「一緒に苦しん」でいることを切々と訴えている。〈ペドロ岐部〉が語る「転び者の苦しきも心底知っている」「神さま」像と同じである。

第二に〈ペドロ岐部〉が山田長政に神の働く領域について語る場面。アユタヤに日本人だけの「地上の国」建設の夢を語る山田長政に対して〈ペドロ岐部〉は「一人一人の人間の心の奥ふかい影のなかに作られ」る「神の国」について語る。〈ペドロ岐部〉はモレホン神父から山田長政の秘密を聞き⁶⁾、そうした心の奥に神の働きがあることを主張する。その秘密とは口のきけない王女を不憫に思い、誰も見ていないところでは王女を慰めるために刀で軽業を見せることであった。富や権力を追求し闘いに明け暮れる山田長政にも別な一面があったのである。しかも王女の前で軽業を披露する山田長政の姿は聖母の前で軽業を披露したアナトール・フランス『聖母の軽業師』を連想させる。結局、山田長政は〈ペドロ岐部〉の話に耳を傾けることはなく、「地上の国」建設に全力を注ぎ続けるが、心の秘密を解き明かした〈ペドロ岐部〉は忘れ難い存在となる。

第三にモレホン神父がアユタヤでの日本人たちに思いを馳せる最後の場面。敵の策略によって山田長政が毒殺され日本人町も荒廃し、〈ペドロ岐部〉も日本潜入後5日後に逮捕され殉教を遂げる。他の日本人も殺されたり、どこかに逃げ延びたりしている。生き残ったのは一人の赤ん坊だけになった。そうしたアユタヤでの日本人たちの運命をつぶさに目撃したモレホン神父は最後に感慨を漏らす。

モレホン 人はそれぞれにわが身を賭けたもののために死んでいく。ペドロ岐部も、オーナ・セーナ・ピモック・長政殿も。その二人の臭いが、この日本人町の跡のどこかにくすぶっているようだ。その人間の臭いのなかには神がいる。神もその跡を私たちと同じように、つらそうに見ておられる気がする。

(遠藤周作『メナム河の日本人』新潮社、1973.9)

先に〈ペドロ岐部〉が嘉助に語った人間の哀しみや苦しみに寄り添う同伴者としての「神さま」像がここにも見られる。モレホン神父が感じているのは地上における人間の儂さであり、その夢の痕跡を「人間の臭い」という身体感覚で捉えているのだ。しかも『沈黙』から『イエスの生涯』、『死海のほとり』と発展してきた人間の哀しみや苦しみに寄り添う同伴者イエスの姿が神の働きとして明示されている。また、人間の心の奥に神が働く領域があるというように、「第三のディメンション」と呼ばれる「魂」の領域まで描かれている。

要するに、『メナム河の日本人』は歴史小説としてだけでなく、心理小説という側面も持っているのだ。さらには、心の奥の奥に潜む「第三のディメンション」である魂の領域にまで踏み込んでいる。こうした様々な側面から見直される必要のある作品であろう。

2. エッセイの中の〈ペドロ岐部〉

戯曲『メナム河の日本人』(1973)の次に〈ペドロ岐部〉が登場する作品は評伝『銃と十字架』(1979)であるが、その間に6年もの時間を費やしている。この頃にはH・チースリク教授の〈ペドロ岐部〉研究⁷⁾もほぼ完成しており、〈ペドロ岐部〉の全貌も明らかになりつつあった。1965年には出身地の国東半島に銅像も建てられ地元での顕彰運動も大いに盛り上がっており、資料に関しては小説を書くのに十分な材料が揃ったと言える。だが資料だけでは小説は書けない。作家の創作意欲を刺激する何かが必要なのである。この辺りの事情に関しては、『銃と十字架』の「あとがき」に「彼は今日まで私が書きつづけた多くの弱者ではなく、強き人に属する人間である。そのような彼と自分との距離感を埋めるため、やはり長い歳月がかかった」とある。『沈黙』をはじめ遠藤がこれまで書いてきた人物があくまでも「弱者」であって、〈ペドロ岐部〉のような「強者」ではなかったのである。こうした遠藤と〈ペドロ岐部〉との「距離感を埋める」作業の過程はいくつかのエッセイで確認することが出来る。そこで『銃と十字架』を考える前に、〈ペドロ岐部〉について書かれているエッセイをたどることとする。

まず「彼等と西洋」(『野生時代』1975.5)。題名の「彼等」とはヨーロッパに留学した最初の日本人たちを意味する。遠藤はフランス留学体験から「彼等」に関心を持つようになったと語っている。日本人で最初のヨーロッパ留学生ベルナルドや荒木トマスなど何人かが紹介されており、そのうちの一人が〈ペドロ岐部〉であった。

カスイ岐部はおそらく日本人で最初に中近東にわたり、ローマに赴いた青年である。岐部は国東半島の豪族の子で有馬の神学校で学んだ後、幕府の追放令にあいマカオに逃げた。だがマカオの聖職者たちの無理解に反抗した彼は陸路、バルシャに行き、聖都エルサレムにたどりつき、そこから更にローマに単身、渡っている。一六二〇年(元和六年)のことである。彼はそこで司祭となり、グレゴリオ大学で勉強(その名簿は今日でも残っている)、一六二三年にポルトガルから日本への帰国の途についている。彼がその旅の途中、シャムのアユタヤで山田長政と出会ったことを人はあまり知らない。

(傍線部引用者／遠藤周作「彼等と西洋」／『野生時代』1975.5)

〈ペドロ岐部〉の略歴に関しては事実をそのまま列挙しているだけだが、最後にわざわざ山田長政との出会いを強調している点に注目すべきだろう。戯曲『メナム河の日本人』(1973)の余韻を感じることができる。

次に『走馬燈 その人たちの人生』(毎日新聞社、1977.5)。「日本人でありながら、イエスと関わった」⁸⁾人物を追って日本の各地やメキシコ、フランス、ポーランド、エルサレムなどを取材した「創作ノート」⁹⁾である。この中には『沈黙』に関わる「長崎〈フェレイラのこと〉」「文京区・小日向一丁目〈キャラ神父のこと〉」、『鉄の首枷——小西行長伝』(1977)と関わる「室津

にて〈小西行長のこと〉」「岐阜県・春日村〈行長の逮捕〉」「天草島・仏木坂〈清正のこと〉」「対馬・厳原〈小西マリアのこと〉」「熱海市・網代〈おたあのこと〉」「韓国・蔚山〈山川長兵衛尉のこと〉」「韓国・熊川〈ある陶工師の子孫〉」「韓国・釜山市〈内藤如安のこと〉」「長崎市・大波止〈内藤如安のこと〉」、『侍』(1980)に関わる「牡鹿半島・月ノ浦港〈偽りの使節〉」「メキシコベラ・クルス〈支倉常長のこと〉」「南仏 サン・トロペ〈支倉常長のこと〉」「宮城県・支倉村〈支倉常長のこと〉」などがある。さらには『最後の殉教者』(1959)、『女の一生 一部・キクの場合』(1982)と関わる「島根県・津和野〈浦上村の祐次郎のこと〉」や『女の一生 二部・サチ子の場合』(1982)』に登場するコルベ神父に関わる「ポーランド ニエボカラノフ村」や『イエスの生涯』『死海のほとり』『キリストの誕生』(1979)に関わるエルサレムとイスラエルなど様々な作品の源泉ともなっている。

〈ペドロ岐部〉に関しては「長崎〈フェレイラのこと〉」「長崎県・北有馬〈有馬神学校のこと〉」「仏蘭西・リヨン市〈ボルロ神父のこと〉」の中で少し名前が登場し、「国東半島〈ペドロ岐部の話〉」「アユタヤ〈ペドロ岐部の話〉」では半生について語られている。中でも「アユタヤ〈ペドロ岐部の話〉」における山田長政との関わりは重要である。

裏づける資料はないが、同じ日本人である山田長政とペドロ岐部とは、このアユタヤの日本人町で顔を合わせたであろう。二人がどのような対話をかわしたか、我々には残念ながらわからない。

アユタヤの廃墟にたたずんで、鳥の声を聞きながら、私はいつの日かペドロ岐部を主人公に小説を構想する日が来たら、この長政と彼との会話を書こうと思った。一方は日本を逃れた同胞のために理想の国を築こうとした男、もう一人はその日本にふたたび戻り、同胞のために神の国を説こうとした男、同時代に生まれ、同じように波乱の生涯を送りながら、地上の国と神の国とを夢みることで別の生き方を選んだ二人の男がここで顔を合わせたのである。(傍線部引用者／「アユタヤ〈ペドロ岐部の話〉」／遠藤周作『走馬燈 その人たちの人生』毎日新聞社、1977.5)

前述のように『走馬燈』は「日本人でありながら、イエスと関わった」人物について書かれたエッセイである。そのため山田長政が章題に出て来ることはない。おそらく遠藤は「アユタヤ〈ペドロ岐部と山田長政の話〉」とでもつけたかったのかもしれない。だが、山田長政は日本人ではあるが「イエスと関わった」人物ではないので章題から削除されたのであろう。ここで重要なのは資料にはないがアユタヤで山田長政と〈ペドロ岐部〉が出会ったことと、二人の生き方の違いが「地上の国」と「神の国」という『メナム河の日本人』で登場した対立項で提示されていることである。この対立項が展開した先に『銃と十字架』や『王国への道——山田長政——』(1981)がある。

そして、「石仏の里 国東」(『太陽』, 1977.7)。〈ペドロ岐部〉の故郷である国東半島を訪ねた

取材旅行の記録である。エッセイの冒頭部で〈ペドロ岐部〉への思いと略歴が語られる。

国東をいつかは訪れようと思っていた。国東を故郷とする一人の実在人物のことを書くつもりだったからである。

その男の名は岐部という。今日でも国東半島の北端にこの名を持った漁村があるが彼の一族は四百年ほど前、そこの豪族だった。彼の父は大友宗麟に属し、その影響をうけて熱心な切支丹になったが、彼もまた島原有馬の神学校に入学して生涯を信仰に生きようとした。

(中略)

だがこの男はその帰国の途中、当時、シヤムにいた山田長政に会い、小野田少尉のかくれていたルバング島から日本に戻ったあと、東北に潜伏して遂に捕まり、過酷な拷問を受けても屈せず、遂に江戸で死ぬという数奇な生涯を送っている。

(傍線部引用者／遠藤周作「石仏の里 国東」／『太陽』, 1977.7)

〈ペドロ岐部〉の略歴の中で、シヤムで山田長政に会ったことと東北で捕まったことの2点は注意すべきであろう。『メナム河の日本人』以来の山田長政と〈ペドロ岐部〉の関係性と『侍』の主人公のモデル支倉常長との関連を裏付けるものとなるからである。

いずれにしろ遠藤は国東半島を訪れ、石仏や寺社仏閣を目にして、複雑な宗教性を実感する。国東半島には宇佐八幡宮、朝鮮仏教、平安仏教など様々なものが「ゴツ煮のようにそのまま共存して」おり、その上に「大友宗麟の勢力で西欧の基督教もはいりこみ」、「ペドロ岐部のような切支丹まで生ん」だ。「秘境」の地であり、「我々の解せぬ謎」に満ちている。それこそ国東半島の魅力だという。こうした複雑な国東半島の情勢について『銃と十字架』では少ししか触れられないが、後に大友宗麟を主人公にした『王の挽歌』では、国東半島が豊後国を統治するための要所となっている。大友宗麟は国東半島の田原家の娘と結婚するなど様々な策略を使って国東半島の勢力を自身の統治下に取り込んでいくことで、豊後国の支配体制を固めていったのである。その意味ではこのエッセイは『銃と十字架』ばかりではなく『王の挽歌』(1992)の取材ノートとも言える。

続いて「世界史のなかの日本史」(『文学界』, 1978.1)。『銃と十字架』執筆準備中に書かれたエッセイ。世界史のリズムのなかで日本史を考えるべきというテーマをもとに日本人で最初にヨーロッパに留学した人たちが、大航海時代という世界的な冒険の気運の中で、冒険的生涯を送った意味を遠藤は問いかけている。その代表として〈ペドロ岐部〉を取り上げる。

この前、国東半島にある岐部という小さな町に行ったが、それはここ出身の青年もまた、島原半島の神学校で学び、その後、ヨーロッパに留学したことを知ったからであった。

(中略)

留学を終えた彼は、その後、日本に帰る途中、シヤムのアユタヤに寄った。当時のアユタ

ヤは山田長政を首領にする日本人傭兵と日本商人とが日本人町を作っていたから、彼と山田長政はきっと顔を合わせたにちがいない。長政のように異国の地に地上の王国をこしらえようとした男とこの青年のようにひたすら精神の王国を目指した男とがどのような会話をしたか、私など知りたいところである。

彼はその後、あの小野田少尉のひそんでいたルパン島に渡り、そこから白蟻のため破損した古船を手に入れて日本に戻っている。そして東北の仙台附近で捕えられ、過酷な拷問を受けた後、死んだ。

(傍線部引用者／遠藤周作「世界史のなかの日本史」／『文学界』, 1978.1)

「地上の国」「神の国」から「地上の王国」「精神の王国」へと「王国」という言葉に変わっていることに注意したい。『侍』の自作解説¹⁰⁾ではタイトルを『侍』ではなく『王に会いに行った男』としてもよかったと語っているように、『侍』において「王」は重要な意味を持っている。しかも「王」と言ってもスペイン国王やローマ法王のような地上の「王」だけではなく、人間の精神の「王」たるイエスをも含んでいる。このエッセイで山田長政が「地上の王国」建設を夢見て奮闘し、〈ペドロ岐部〉が「精神の王国」を目指してその果てに殉教を遂げたことと重なる。山田長政が目指したのは地上の「王」であり、〈ペドロ岐部〉が考えたのは精神の「王」であるイエスであったのだ。

次に「東北の切支丹 ― 支倉常長とペドロ岐部」(『探訪大航海時代の日本⑧回想と発見』小学館, 1979.3)。東北の切支丹と殉教の歴史を語ったエッセイである。支倉常長、カルバリオ神父、後藤寿庵、〈ペドロ岐部〉など殉教者の足跡を辿る。支倉常長を主人公とした『侍』や〈ペドロ岐部〉を主人公とした『銃と十字架』の取材旅行記でもある。副題に二人の名前があるが、支倉常長と〈ペドロ岐部〉は直接交流したわけではない。二人を含む様々なキリシタンたちがそれぞれ「日本人でありながら、イエスと関わった」人物であり、「切支丹最後の地」である東北で確かに生きた痕跡を残したのである。例えば、支倉常長は慶長遣欧使節としてメキシコ、スペイン、ローマを訪問しローマ法王にまで謁見している。また、日本人として初めて太平洋、大西洋を往復した人物であるが、それほどまでの偉業を成し遂げながら帰国後は政策の転換もあり不遇のまま過ごし、最後には切支丹として処刑された。政治に翻弄された人生だったのである。一方、〈ペドロ岐部〉も日本人として初めてエルサレムを巡礼して、ローマで神父となり、1630年日本に帰国後、長崎、東北で潜伏神父として9年間活躍した。1639年東北の水沢の地で逮捕され、江戸で殉教を遂げた。このようにエッセイに登場する人物は殉教者たちであり、一方で「転び者」も存在した。そうした全てをひっくるめて東北の地で見られた「切支丹最後」の姿を描いているのである。

最後に遠藤周作・山本健吉「リレー対談 長崎あれこれ」(『月刊自由民主』1978.7)。『銃と十字架』が『中央公論』連載中に開かれた山本健吉との対談である。山本は長崎で生まれ育った人物であり、遠藤にとって慶応大学の先輩にあたる。また、山本はフランシスコ・ザビエルの半生

を描いた『きりしたん事始』(芸術社, 1956)で遠藤から切支丹関係の資料を提供してもらった
り、「天草四郎」について「評伝」¹¹⁾を書いたり切支丹に対して少なからぬ関心を抱いている。
そんな山本に対して遠藤は〈ペドロ岐部〉のことを熱く語る。

遠藤 (略) やっぱりすごいやつ、いますよ。僕がさっき保存してほしいっていった、学校の卒業生の岐部なんていうのは、徳川家康の大追放でマカオへ行くでしょう。そして、
すぐ勉強するんだけど、それじゃ飽き足らなくて、もっと勉強したいとゴアまで行って
……もちろん路銀もないのに。三人、小西行長の孫と一緒にってます。

(中略)

だけど、すごいでしょう。あの時代にアラビア砂漠を隊商とエルサレムへ行って、エルサ
レムから……だからあの時代を調べると、すごいやついますよ。で、意外とそういう人のこ
とを、学校の歴史なんかで教えないんですよ。

(傍線部引用者／遠藤周作・山本健吉「リレー対談 長崎あれこれ」／『月刊自由民主』
1978.7)

「長崎あれこれ」という題名通り対談では長崎に関する様々な話題がのほり、最後に有馬神学
校に及び、さらに卒業生である〈ペドロ岐部〉の話に至る。遠藤は終始一貫して〈ペドロ岐部〉
を「すごいやつ」として興奮して語っている。『銃と十字架』連載中ということもあり〈ペドロ
岐部〉に対する並々ならぬ遠藤の関心の高さを窺い知ることが出来よう。

以上、エッセイにあらわれた〈ペドロ岐部〉を確認してみた。エッセイや対談などの差はある
が最初は単なる知識にとどまり事実を列挙したに過ぎなかった。それが故郷である国東半島や
ローマ、アユタヤ、逮捕の地である東北水沢など〈ペドロ岐部〉の足跡を辿ることで遠藤が自分
の近い人物として次第に「距離感」を埋めていったと言える。こうした過程を経て『銃と十字
架』に辿りつくのである。また、ほとんどのエッセイで山田長政と〈ペドロ岐部〉の生き方の違
いが対照的に取り上げられており、二人の対立がエッセイの中心となっている。

3. 『銃と十字架』における〈ペドロ岐部〉

『銃と十字架』は「銃と十字架——有馬神学校^{セミナリオ}」という題名のもとで『中央公論』の1978年
1月号から12月号まで連載されたあと、1979年4月、『銃と十字架』と改題され中央公論社より
刊行された。小説ではなく事実を客観的に述べる評伝の形式を取っている。これも先行研究は少
なく1本の書評と4本の論文¹²⁾があるのみである。

初出の副題にあるように有馬神学校が重要な役割を担っており、本文の約3分の1は有馬神学
校や卒業生に関する記述で占められている。主人公の〈ペドロ岐部〉も有馬神学校の卒業生であ
ることを考慮すると作品全体が有馬神学校の卒業生について描かれたとも言う。この辺りの

事情に関しては前出の取材ノートである『走馬燈』が参考になる。同書の「長崎県・北有馬〈有馬神学校のこと〉」では『銃と十字架』の構想を垣間見ることが出来るからだ。

上智大学のチースリック教授や長崎の片岡弥吉教授の研究のおかげで、私たちはこの有馬神学校で学んだ生徒たちの名や略歴を知ることができる。生徒たちだけではなく、そこで教えた教師たちのことを調べる手がかりも与えられる。

私は、この姓名と略歴を調査された両先生の論文をひろげるたびに、そこに書かれた一人一人の生徒たちの生涯を、小説家として空想することがある。いつかは書きたいと思っている「卒業生」という作品の下準備をしているのかもしれない。

(傍線部引用者／遠藤周作『走馬燈 その人たちの人生』毎日新聞社、1977.5)

この段階でタイトルは『銃と十字架』ではなく「卒業生」であったことがわかる。整理すると、「卒業生」(1977)→「銃と十字架——有馬神学校」(初出：『中央公論』, 1978.1~12)→『銃と十字架』(初版：中央公論社, 1979.4)という変遷をたどったことになる。そもそも遠藤が有馬神学校に関心を持つようになったのは『沈黙』(1966)執筆の頃から長崎を度々訪れ、有馬神学校のあった日之枝城¹³⁾付近を歩きまわり、往年の神学校の様子を偲んだことがきっかけである。また、『銃と十字架』の「あとがき」によると、遠藤が〈ペドロ岐部〉を知ったのも「十数年前にふと読んだチースリック教授の論文」であった。「チースリック教授の論文」とは『キリシタン人物の研究』のことで、中には有馬神学校についての記述もあり、これもまた有馬神学校への関心を高めたことは確かである。しかも「十数年前」というのは『沈黙』の取材のため遠藤が長崎をしばしば訪れた時期と重なる。遠藤が有馬神学校や〈ペドロ岐部〉に関心を持つようになったのは同じ時期だったのである。

作品自体は「一五八〇年に開校して三十三年の間存続したが、迫害のため閉鎖した」有馬神学校の卒業生の生涯を軸に、有馬神学校が設立された経緯や1587年豊臣秀吉によって出された禁教令に始まる迫害から1639年「切支丹最後の地」東北で逮捕され殉教した〈ペドロ岐部〉の最後までが、半世紀に及ぶ日本における基督教迫害の歴史と共に語られる。有馬神学校の卒業生の中には〈ペドロ岐部〉のように殉教した「強者」もいれば、千々石ミゲルのように背教した「弱者」もいる。誰もが神学校で西洋を学んだ日本人として西洋基督教国の日本に対する蔑視や東洋侵略の肯定という教会の罪とたたかったのである。

中でも注目すべきは千々石ミゲルと荒木トマスである。二人はそうした西洋とのたたかひの末棄教をしてしまったからである。この棄教問題について遠藤は既に「主観的日本人論2 テージュ川のほとりで 基督教棄てた二人」(『朝日新聞』, 1972.8.28)¹⁴⁾で提起している。タイトルが示すようにこのエッセイは遠藤が主観的に日本人について論じたものである。「主観的日本人論2」ではポルトガルのテージュ川を訪れて、400年前同じ場所に上陸した天正遣欧使節について思いをはせている。その上で使節の一人であった千々石ミゲルと同じ頃この地を訪れた荒木ト

マスの二人が帰国後なぜ基督教を棄てたのか心の秘密に迫っている。

明治の初期における外国文化の輸入とちがい、切支丹時代に基督教は日本人にとってヨーロッパそのものだったし、ヨーロッパはまた基督教そのものだったのである。だから千々石ミゲルやトマス荒木が長い間信じた基督教を棄てることは、言いかえればヨーロッパを棄てることだったのである。もちろん、彼等の棄教には迫害による圧迫とか、拷問にたいする恐怖も考えられるだろう。だが、それ以上に彼等はこの迫害下にヨーロッパの考え方では死ねないと考えたからにちがいない。ヨーロッパで育った基督教と自分の体液の間に溶けあわぬものを感じたからにちがいない。その溶けあわぬものを彼等はその留学中に少しずつ考えたのではないかと私は想像するのだ。

この二人の心の秘密をさぐる資料は一つとしてない。ないがしかしこの二人の心の秘密は私には見のがすことができぬような気がするのである。

(傍線部引用者／遠藤周作「主観的日本人論2」／『朝日新聞』, 1972.8.28)

千々石ミゲルと荒木トマスは有馬神学校の卒業生であり、荒木トマスは神父でもある。その二人がなぜ背教をしたのかという謎は解き難い問題である。手掛かりとなる資料も残されていない。これに対して遠藤は自身の留学体験にひきつけて考える。1950年、遠藤は戦後初の留学生としてフランスへ渡り、「ヨーロッパで育った基督教と自分の体液の間に溶けあわぬものを感じ」て帰国した。同じように二人にはヨーロッパや基督教に対する違和感があったと遠藤は想像する。

これに対して『銃と十字架』では別の理由を提示している。基督教国の植民地政策である。

「見るべきではなかったもの」かつてヴァリニャーノ巡察師が天正少年使節の少年たちを同じ航路で異国に送った時、この「見るべきではないもの」を見させぬよう苦心したことはその書簡からも窺える。だが少年使節の一人、千々石ミゲルはその「見るべきではないもの」を目撃して後に背教者となった。

見るべきではないもの。それは基督教国の東洋侵略の具体的な姿である。

(傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社, 1979.4)

「見るべきではないもの」、すなわち16、7世紀の基督教国が武力により侵略を繰り返し、基督教も肯定していた事実である。千々石ミゲルはそれを目撃してしまったために基督教に違和感を覚え、帰国後遂に背教者になったと語り手は考える。また、題名の『銃と十字架』も基督教国の植民地政策に関わる「銃」、すなわち武力介入と「十字架」、すなわち基督教の教化による現地民の懐柔策を象徴したものであった。時の江戸幕府は基督教国の植民地政策を恐れたからこそ禁教令を強化し鎖国までした。こうした中で唯一異なる対応したのが〈ペドロ岐部〉である。〈ペドロ岐部〉は「見るべきではないもの」を見ながらも千々石ミゲルや荒木トマス、そして江戸幕

府とは違う認識を持つに至ったのだ。

ペドロ岐部が千々石ミゲルや荒木トマスの轍を踏まなかったのは、この基督者の歴史的行為と基督教との明確な区別を認識したためだと思われる。不幸にして千々石ミゲルや荒木トマスは十六、七世紀の西欧基督教会の行動を基督教の基督教の教えそのものと混同した。この世紀の教会の過失を、基督教自体の性格と錯誤したのである。彼等は基督教会もまた歴史的に数多く過ちを犯しながら、より高きものに成長していくのだという「教会の成長」という考えを持ちえなかったのだ。千々石ミゲルや荒木トマスは、この時代の教会の過失を基督教そのものと同一視して、信仰を放棄した。だがペドロ岐部は彼等二人よりも、よくイエスを知っていた…。(傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、1979.4)

作者の推測によらなくてもポルトガルの植民地の中心地であるインドのゴアを訪れた〈ペドロ岐部〉が「見るべきではないもの」、すなわち16、7世紀の基督教国の侵略の実態を見たことは確かである。だが、〈ペドロ岐部〉は千々石ミゲルや荒木トマスと違い、最後まで信仰を棄てることはなかった。しかも、作者はその理由について〈ペドロ岐部〉が植民地政策への協力という「教会の過失」と「基督教そのもの」は区別しており、そこに〈ペドロ岐部〉が「よくイエスを知っていた」からという大胆な推測を述べている。

ではなぜ〈ペドロ岐部〉は「よくイエスを知」ることができたのであろうか。『銃と十字架』では評伝という特質上、登場人物の行動に関しては客観的事実が中心として語られており、語り手の主観は極力抑えられている。それでも、語り手が〈ペドロ岐部〉の心理に踏み込んだ箇所もいくつかあり、ここに謎を解く鍵と〈ペドロ岐部〉の苦悩が隠されている。すなわち、〈ペドロ岐部〉は苦悩を通して同じ苦しみを味わった受難のイエスを知ることが出来たのである。そこで〈ペドロ岐部〉の苦悩の内実を確認したい。

まず、〈ペドロ岐部〉の苦悩と密接な関係を持つ弱さを見せた場面から考える。ここには語り手の主観が如実に表れている。

私の観察では、強固な意志そのものだったペドロ岐部がその生涯のなかで、弱さを見せたのはこれが二度目である。一度目はあの大追放令の時、日本信徒たちを見すててマカオに逃げた時である。二度目は目前に日本を見ながらアユタヤに引きかえたこの瞬間である。だがそのような弱さをここに至って見せたペドロ岐部を、誰も責められぬ。彼の信ずるイエスさえも、十字架での自分の死を予感した前夜、血のような汗を地に落して苦しんだ。イエスはその苦しみのあと、自分の運命を神の意志として引き受けたが、ペドロ岐部はすぐには引き受けられなかったのだ。(傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、1979.4)

語り手の「観察」によると、〈ペドロ岐部〉は生涯の中で2回だけ弱さを見せたという。元来

〈ペドロ岐部〉は「剛毅な性格」と「海賊的な冒険精神」と「頑健な肉体」を持った人物として『銃と十字架』では一貫して描かれていた。その意味ではまさに「強き人」であった。だが、そうした中でわずか2回でも弱さを見せたところは逆に人間らしい姿とも言える。

「一度目」に〈ペドロ岐部〉が弱さを見せたのは、1614年切支丹追放令が出た時、日本に残るか、海外に出て帰国する機会を窺うか2者択一を迫られて、日本を出る道を選んだことである。〈ペドロ岐部〉には神学校を卒業したとはいえ「同宿」にしか過ぎない自分が日本に残るより、日本を出て神父になって帰国した方が信徒の役に立つだろうという大義名分はあった。だが迫害に苦しむ日本の信徒を見捨てたことは事実であり、そのことに対する後ろめたさがヨーロッパへ渡る冒険の原動力ともなる。

そこで〈ペドロ岐部〉はマカオに渡るが、ここでは神父になれる可能性がないことを知った。するとインドのゴアへ行きそこでも神父になれないことを知ると、ゴアから砂漠を通過してエルサレムを巡礼し、ローマにまで至る。金銭的な援助もなく言葉もわからないままほぼ徒歩で走破した文字通り大冒険であった。この冒険を支えたのは、「剛毅な性格」と「海賊的な冒険精神」と「頑健な肉体」の3つであるが、その根底には日本の信徒を見捨てたという後ろめたさがあったと語り手は繰り返し強調する。大事なことは、〈ペドロ岐部〉が「はやく神父となって帰国したい。だが帰国すれば殉教を覚悟しなければならない」という苦悩の中で受難のイエスの姿を何度も思い起こしていることだ。そうして次第に〈ペドロ岐部〉の苦悩とイエスの苦悩の姿が重なってくる。

受難のイエスの姿を彼はいつも思いうかべる。なぜなら、そのイエスの姿は帰国した暁の自らの似姿と理想像とになるからだ。イエスが死を決意して過越祭のエルサレムに戻ったように、ペドロ岐部も死を覚悟して日本に帰るのだ。イエスがその予感通り、彼を迫害する大祭司やサドカイ派に捕えられたように、ペドロ岐部も切支丹を迫害する日本の権力者に捕縛されるだろう。だがイエスが愛した弟子の一人ユダから裏切られたように、ペドロ岐部も愛した誰かから、裏切られるだろうか。

(遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、1979.4)

こうして〈ペドロ岐部〉は受難のイエスに自身の姿を重ねることで、苦悩を克服して「殉教の準備と死の覚悟」を整えて行ったのである。

「二度目」に〈ペドロ岐部〉が弱さを見せたのは神父となりヨーロッパからマカオへ渡り、日本潜入の機会を窺った時のことである。マカオでは日本行の方法がないことと日本での基督教迫害の激化を知り、モレホン神父のアドバイスを受けてアユタヤへ行ったことである。この時、語り手は〈ペドロ岐部〉が拷問や殉教に対して「たじろいだ」と強く非難する一方で、受難のイエスも苦悩したのだから仕方がないと認めてもいる。だが、〈ペドロ岐部〉はアユタヤに渡ると、自分が神父であることを秘密にして黙々と日本潜入の機会を窺っている。マカオで「たじろい

だ」にしろすぐに「殉教の準備と死の覚悟」を固めたのである。以上が〈ペドロ岐部〉の苦悩の内実である。

ところでここにはもう一つ問題がある。作者が意図的に〈ペドロ岐部〉をイエスの「相似形になろうとするキリスト者」¹⁵⁾として描いている点である。〈ペドロ岐部〉が殉教に至る過程とイエスが十字架で死ぬまでの過程が相似形となっているのだ。例えば、イエスが死を覚悟してエルサレムに戻ったように、〈ペドロ岐部〉も死を覚悟して日本に戻った。イエスが捕らわれる直前までゲッセマネの園で苦しみながら祈っていたように、〈ペドロ岐部〉も拷問や死に対して深く苦悩してアユタヤへ退いた。イエスが逮捕される時弟子達に裏切られたように、〈ペドロ岐部〉も一緒に「穴吊り」の拷問を受けた式見神父とポーロ神父が棄教して裏切られてしまった。イエスが拷問を受けて十字架上で死刑になったように、〈ペドロ岐部〉も「穴吊り」などの拷問を受けた末、火あぶりにされて絶命した。こうして〈ペドロ岐部〉と受難のイエスが重なって相似形になるのである。

最後に〈ペドロ岐部〉と山田長政との関係について述べたい。先に確認したように『銃と十字架』で中心となるのは〈ペドロ岐部〉をはじめとする有馬神学校の「卒業生」であった。そのため、山田長政が登場するのはわずかに「山田長政とペドロ岐部」の章にしかすぎない。しかも評伝という形式上、史実に基づいた山田長政がいた頃のアユタヤの歴史に関わる記述が大半を占めている。それでも語り手は章の最後の部分で山田長政と〈ペドロ岐部〉との関係を述べる。

けれども長政とペドロ岐部とは、あの十七世紀初頭の日本人として同型の間人である。彼等は共に日本を捨て、日本の外に走った。彼等は共に日本をこえた国際人であろうとした。彼等は共に自分の創る国を夢みた。だが長政が地上の栄達を考え、日本を離れた場所に日本人の王国を得ようとしてリゴールに赴いたのにたいし、ペドロ岐部は日本に戻って神の国をそこに築こうとした。長政がその地上王国のために死を懸けたように、岐部もこの神の国に死を賭けた。地上の王国と神の王国。二人の夢みたそれぞれの王国はあまりに離れ、あまりに次元を異にしていた。(傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、1979.4)

『メナム河の日本人』やその他のエッセイに既出ではあるが、「地上の王国」を築こうとした山田長政と「神の王国」のために働く〈ペドロ岐部〉という二人の生き方の違いである。これまでの主張と特に変わったところはないが、「評伝」という制約の中にならざるを得ないという作者の強い意志が感じられる。

4. 『王国への道』における〈ペドロ岐部〉

「地上の王国」を築こうとした山田長政と「神の王国」のために働く〈ペドロ岐部〉の生き方の違いを示した最後の作品が『王国への道——山田長政——』（初出：『太陽』、一九七九年七月

～翌々年二月号)である。副題に示されているとおり主人公は山田長政である。〈ペドロ岐部〉は副主人公に過ぎず、ストーリーの中心となるのはあくまでも山田長政である。駿府の駕籠かきでしかなかった長政が出世の機会を求めて日本を飛び出しアユタヤへ渡り、リゴールの藩主として「地上の王国」を築く一歩手前まで登りつめていくことがストーリーの中心となっている。だが最後には身内の裏切りに遭い毒を盛られ「地上の王国」の夢は半ばで挫折する。そんな山田長政が成功していくのと同時進行で〈ペドロ岐部〉も神父となるためにマカオからゴア、エルサレムを経てついにはローマに辿りつく。神父となってからはローマからポルトガル、ゴア、マカオ、そしてアユタヤで山田長政と再会し、最後には基督教迫害下の日本へ戻り殉教を遂げる。このように別なものを目指しながらも同じような情熱を持った二人の人生が交錯していくところが重要である。では順に山田長政と〈ペドロ岐部〉の関わりを確認する。

作品の冒頭は1614年の切支丹追放令から始まる。バテレンの宣教師、有馬神学校の学生たちと同宿の〈ペドロ岐部〉たちは長崎から船に乗ってマカオへと向うが、同じ船に山田長政が密航していた。最初に山田長政と言葉を交わす西ロマンは、史実では1627年〈ペドロ岐部〉とアユタヤで再会した人物であるが、『王国への道』では冒頭部分にしか登場しない。山田長政と〈ペドロ岐部〉が初めて言葉を交わすのは、船の中で船酔いに苦しむ神学生たちをばかにする山田長政を〈ペドロ岐部〉がたしなめた時からである。〈ペドロ岐部〉は「大友家の家臣」であった武家の誇りを持つ強い意志を持った人物として登場する。

マカオに到着すると、山田長政はすぐに阮子竜の手下となりアユタヤに住む日本人相手の商売を手がける。〈ペドロ岐部〉はマカオで神父になる可能性もなく、厄介者扱いされて不満を抱えていたがアユタヤへ行くという山田長政から刺激を受け、マカオを出る決意をする。『銃と十字架』ではヨーロッパで学び神父となった荒木トマスの存在が〈ペドロ岐部〉にヨーロッパ留学の夢を与えたことになっているが、ここでは荒木トマスは登場しない

アユタヤに着くと山田長政は様々な策略をめぐらし、日本人傭兵隊の中で頭角をあらわし、遂には傭兵隊長にまで登りつめる。一方、〈ペドロ岐部〉も過酷な旅の末マカオからエルサレムを経てローマへ至り、ついに神父となる。二人は互いのことが気になりながらそれぞれの道を進んでいく。

1627年、日本へ潜入する方法を捜すために〈ペドロ岐部〉は山田長政のいるアユタヤへ着く。史実では『メナム河の日本人』に登場したモレホン神父からアドバイスを受けてアユタヤへ向ったのだが、モレホン神父は登場しない。また、『銃と十字架』では〈ペドロ岐部〉がアユタヤに着いた時、神学校の先輩である西ロマンと再会したが、西ロマンも登場しない。さらに、〈ペドロ岐部〉は山田長政に対して神父であることを公表し、神父として小さな教会を開いたり、医療活動にも従事していく。『銃と十字架』では切支丹であれば日本行の船に乗ることができないので、アユタヤにいた3年間は自分が神父であることを隠していた。

アユタヤで再会した山田長政と〈ペドロ岐部〉は互いに親近感を抱きながらも生き方の違いを実感して別れる。

要するに二人の議論はいつまでも平行線をたどっていた。ペドロ岐部は長政の生き方がこの世のはかない幻影を追ったものだと考えていたし、長政は岐部の信ずる神とか永遠の命がわからなかった。

ただこの二人はたがいに気がつかなかったが一点においてよく似ていた。それは狭い日本にあくせくと生きず、おのれの生き方のために海をこえて新しい世界に突入したことだった。自分の熱情を信じて、まっしぐらに進むその生き方には両者共通したものがあつた。

(遠藤周作『王国への道——山田長政——』平凡社, 1981.4)

(神の国はな、すべて人の魂のなかに作られる)

岐部が言った言葉はまだ長政の耳のなかに残っていた。

(お前は地上の国ば作るがよか。しかしこの俺はな、神の王国のため働くのよ)

長政がじっと岐部を船の上から見おろすと岐部もまた腕をくんだまま、長政を見上げていた。二人はたがいに沈黙したまま、すれ違った。

(遠藤周作『王国への道——山田長政——』平凡社, 1981.4)

ここにも「地上の王国」を築こうとする山田長政と「神の王国」のために働く〈ペドロ岐部〉の生き方の違いが明確に表れている。二人の生き方の違いはこれまで確認して来たとおりで格別新しい内容ではないが、小説らしくより生き生きとした言葉で語られている。もちろん、これまで確認したように史実では二人の間に交流は全くなく、互いに無関心であった。

最後に山田長政は妹のように可愛がっていた「ふき」に毒を盛られて死ぬ。「ふき」は山田長政が出世する際の犠牲になった城井久右衛門の娘であり、山田長政は父の仇として殺されたのである。史実では敵の宰相に毒殺されたのだが、より劇的な形で最後の場面を飾っている。一方、〈ペドロ岐部〉はアユタヤからフィリピンを経て日本潜入に成功する。長崎や東北で神父として9年間活躍した後、仙台で逮捕された。「穴吊り」などの拷問を受けた末に火あぶりにされ殉教を遂げた。〈ペドロ岐部〉は最後に役人たちに対して「私のことはおぬしには、わからん…」という言葉を残して絶命した。おそらく役人だけではなく山田長政にも言いたかった言葉であろう。同様に『銃と十字架』でも棄教を勧める役人たちに対して、〈ペドロ岐部〉は「あなたに私の基督教は理解できぬ。だから何を言っても無駄なのだ」と答えて絶命した。ほぼ同じ終り方である。

以上、山田長政と〈ペドロ岐部〉の関わりを確認した。こうして概観すると、山田長政は主人公であるだけに人物関係や行動に大胆な創作がなされており、より劇的に描かれている。〈ペドロ岐部〉とも密接な関係にある。反対に〈ペドロ岐部〉は他の人物との交渉がほとんど描かれていない。『銃と十字架』ではマカオで荒木トマスやモレホン神父、アユタヤで西ロマノと出会ったのだが、そうした人物は省略されており、その分、山田長政との交流の深さが一層際立つ構造になっている。また、『銃と十字架』で〈ペドロ岐部〉は2度弱さを見せたが、『王国への道』では少しも弱さを見せることもなく、「剛毅な性格」と「海賊的な冒険精神」と「頑健な肉体」を

持った人物として一貫して描かれている。最初から最後まで一貫して〈ペドロ岐部〉は「強者」だったのである。

おわりに

遠藤文学において〈ペドロ岐部〉が登場する『メナム河の日本人』、数編のエッセイ、『銃と十字架』、『王国への道』について概観した。『メナム河の日本人』では〈ペドロ岐部〉の外面的な弱さと内面的な強さが明確に表れていた。数編のエッセイでは、「強者」である〈ペドロ岐部〉との心の距離感が埋められていく過程を見ることができた。『銃と十字架』では2度だけ弱さを見せたが、それ以外は強者として信仰を貫き、受難のイエスと相似形となった〈ペドロ岐部〉の姿が現れた。『王国への道』では一貫して「強者」としての〈ペドロ岐部〉の姿を見ることが出来た。

これらの作品を改めて見直すと、〈ペドロ岐部〉が登場するほとんどの作品には対照的な存在として必ず山田長政が登場しており、二人の関係性が重要なテーマを形成している。すなわち、「地上の王国」を築こうとする山田長政と「神の王国」のために働く〈ペドロ岐部〉との生き方の違いであり、目指すものは異なるが同じような情熱を持ち、海外に勇躍した日本人の姿である。

そして他の作品との関連も考えられる。〈ペドロ岐部〉の信仰の対象であるイエスを描いた『死海のほとり』『イエスの生涯』『キリストの誕生』。評伝という同形式の『鉄の首枷』『侍』。2項対立のバリエーションである『侍』の長谷倉とベラスコ、『王の挽歌』の豊臣秀吉と大友宗麟。いずれの作品も〈ペドロ岐部〉が直接登場することはないが、〈ペドロ岐部〉の生涯と深い関連があり、遠藤文学の「歴史小説」をより豊かな世界へと導くのに役立っているのである。

注

- 1) 〈ペドロ岐部〉については「ペドロ岐部」「カスイ岐部」「岐部神父」「ペドロ岐部カスイ」「ペドロ・カスイ・岐部」など様々な呼び方があるため本稿では〈ペドロ岐部〉と統一して呼ぶこととする。
- 2) 次章から確認するが本稿で取り上げる作品に関する先行研究がほとんどないことが〈ペドロ岐部〉に対する関心の低さを物語っている。
- 3) 拙稿「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(一) — 『留学』『沈黙』を中心として —」『遠藤周作研究第八号』(2015.9)。
- 4) 次の4本である。
 - (1) 鈴木秀子「『メナム河の日本人』」(『世紀』, 1973.11)
 - (2) 麻生直「日本人の原像にせまる — 雲「メナム河の日本人」(上演劇評)」(『テアトロ』, 1973.12)
 - (3) 矢代静一「二人三脚『メナム河の日本人』」(『文芸』, 1973.12)
 - (4) 三浦朱門「挫折する人生 — 遠藤周作『メナム河の日本人』について —」(『海』, 1973.12)
- 5) 遠藤周作「小説家の海外旅行」(『海』1979.7)

- 6) 山田長政の秘密を知っているモレホン神父と〈ペドロ岐部〉が二人とも神父であることに注意したい。
- 7) H・チースリクには〈ペドロ岐部〉研究の書として『キリシタン人物の研究 — 邦人司祭の巻 —』(吉川弘文館, 1963.12), 『海賊の末裔 — 波乱にとんだ岐部神父の物語 —』(中央出版社, 1969.8), 『世界を歩いた切支丹』(春秋社, 1971.6)の3冊がある。
- 8) 「あとがき」／遠藤周作『走馬燈 その人たちの人生』(毎日新聞社, 1977.5)
- 9) 『走馬燈 その人たちの人生』の帯には「創作ノート；宗教史的回顧に拠るエッセイの試み」とある。
- 10) 遠藤周作・三浦朱門「“王”にあいに行った男 — 書き下ろし長編『侍』をめぐって —」(『波』, 1980.4)
- 11) 山本健吉「天草四郎」(『人物日本の歴史 10 桃山の栄光』小学館, 1976, 所収)
- 12) 次の4本がある。
 - (1) 久保田暁一「遠藤周作の視点 — 『鉄の首枷』と『銃と十字架』について」(『キリスト教文学の可能性』だるま書房, 1979.11),
 - (2) 尾崎秀樹「大航海時代」(『歴史文学夜話 鷗外からの180篇を読む』講談社, 1990.7),
 - (3) 広石廉二「『銃と十字架』 — 殉教者の論理」(『遠藤周作の縦糸』朝文社, 1991.10),
 - (4) 三木サニア「遠藤周作『銃と十字架』」(『キリスト教文学』, 2011.8)。
- 13) 「有馬, 日之枝城」(『切支丹の里』中央公論社所収)
- 14) このエッセイは『朝日新聞』に5回に分けて連載された。ちなみに1回目では, アユタヤの日本人町の跡地を訪れ山田長政に対して思いを馳せている。
- 15) 〈ペドロ岐部〉とイエスの相似形の問題は作者が自作解説で触れている。
 遠藤 それはもう明らかにロドリゴ, キチジローの線と対比させていました。でもしかし一方では, 『沈黙』のときは同行者イエスといいますが, こちらの苦しみを知っているイエスというのを書きましたけれども, ペドロ岐部のとき(引用者注:『銃と十字架』)はイエスに少なくとも相似形になろうとするキリスト者ですね。イエスもまたこの同じ苦しみを受けたんだからという, 相似形になろうとするキリスト者を書くことで, 右翼左翼を固めようという気持はありました。その相似形になろうという気持が, やがて『侍』のなかで侍がキリストというのはぜんぜん信じなかったけど, 「あの人」と相似形になっていくわけです。(傍線部引用者／遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』春秋社, 1991.11)